



やぐら通信

～ひとみキラキラ豊かな心と体の矢倉っ子～

くりかえし出会いなおすこと

県平和祈念館の主査である木村さんを講師として招き、6年生に戦争の話をしていただいた。戦時中の子どもたちの暮らし、出征をめぐる本人や家族の思いなど、持参された貴重な史料をもとに語ってくださった。

子どもたちへの話の後、校長室に立ち寄っていただいた。

平和祈念館は、県民の戦争体験を語り継ぎ、戦争の悲惨さ、平和の尊さについて学び、平和を願う心を育むことを願って設立されたものである。こうした願いを受けて、日々、業務にあたっている木村さんには、一つの姿勢がある。それは、今回、子どもたちに話をしたが、おそらくその話は、いつのまにか記憶から消えてしまう。中学生になってからまた同じ話をして、覚えているかたずねても、忘れたと言うだろう。そんな子どもたちも、中には大人になってからまた来館することがある。そこでまたなるほど、そうだったのかと感慨深いものがあったと感想を述べる。ところがそれも、またそのうち自然と消えていくのだという。祈念館で仕事をしていると、何度となく説明することになるのだけれど、それはそれでいいのだと思えるようになったらしい。

教えることを本業とする学校教師としての私は、せっかく話をしたのだから、しっかり覚えておいて欲しいと思わないのか尋ねてみたくなった。すると、たしかにそうだろうけど、実際問題としては無理なことで、それよりもくりかえし出会いなおすことが大切だと返ってきた。つまり、一つの出来事も、子どもがそうだったのかと気にかけるのと、青年が気にかけるときの切り口と、大人のそれと、一通り人生を歩んでこられた年配の方がとらえる内容は、少しずつ異なっていて当然である。ただ、その根っこには、このようなことが起こらないで欲しいという願いがずっと流れつづけているということなのではないか、そう考えるようになったということだ。確かに、子どもから青年、青年から大人というように生きていく中で、人はさまざまな立場に立ち、役割を担い、思いや願いは少しずつ進展していくものだ。だから受け止め方が変わるのも当然のことである。くりかえし、さまざまな機会に、いろいろなかたちで戦争と平和のことを考えてもらいたい。折に触れて、ことばにして身近な人と語り合ってもらいたい。薄っぺらな考えで、とにかく平和が大事、戦争反対と唱えてみても、そこには力強さがないし、広がりも深まりも感じられないという木村さんの話に、学ぶということの具体的なあり方があるように思えた。

学校や今の大人が子どもたちにできることは、これからの人生を生きていくための知識なり、技術のすべてを用意し、伝授するというよりも、よりよい生き方を求めて、繰り返し出会いなおしていこうとする姿勢が身につけられるようにすることだと言える。責任の重さを改めて感じさせていただいた。

校長 大林 道範